ディケンズと監獄方式論争

── 無言方式 Silent System 対分離方式 Separate System の論争を考察する

村 山　　繁

Ⅰ　はじめに

『ニコラス・ニクルビー』*Nicholas Nickleby*, 1838-9 で、「そこ、ロンドンのまさにど真ん中で、活気溢れる商売の真っ只中の、喧騒と雑踏の渦のなかには、四方から絶え間なく流れ来る人々がその壁のもとでぶつかり合う、いわば巨大な流れを塞き止めるようにして、ニューゲイト監獄が立っている」（29）と書かれているように十九世紀半ばまで、ニューゲイト監獄を始め、首都の主要な監獄はチャリング・クロスから二、三マイルの都心に集中していた。監獄は、ロンドン市民にとって身近なものであり、ディケンズには特に身近な存在であった。『ボズのスケッチ』*Sketches by Boz,* 1833-6 の素描「刑事裁判所」'Criminal Court'の冒頭で、「小学生の頃、我々はよくニューゲイト監獄の外観を眺めたものだが、そのときの畏怖と敬意の混ざり合った気持ちは決して忘れないであろう」（229）と述べているように、ディケンズの監獄への興味、関心は幼時から始まり、犯罪と刑罰への興味、関心と一体となっていく。

多感な少年時代に、楽天的な父の無計画な借金により苦しくなった家計のために、家族から離され一人靴墨工場へ働きに出された時、ディケンズはどうしようもない屈辱と実際の犯罪者と紙一重のところまで追い込まれたことを強く感じた。そして彼の家族は、負債が返済できず、マーシャルシー監獄（債務者監獄）に収監された。これらの出来事は、ディケンズの監獄（犯罪、刑罰も含めて）への関心をより消すことのできないものにしたのである。靴墨工場での屈辱をトラウマとして一生引きずったという彼の執着心を考慮すれば、監獄、犯罪、刑罰は一つの強迫観念として生涯、彼につきまとったのであろう。

それについて、エドマンド・ウィルソン（Edmund Wilson, 1895-1972）は、評論「ディケンズ ── 二人のスクルージ」'Two Scrooges'で、「少年時代を組織された社会の残酷さによって破壊された、気概のある人物にとって、彼のとりうる態度は〈犯罪者〉のそれか、〈反抗者〉のそれかのどちらかであるのは当然である。ディケンズは想像力のなかでその両方の役割を演じ、死ぬまでそれらのなかに自分の感情のもっとも強い部分を注ぎ込むことになった。監獄や囚人に対する彼の興味は初期の頃から明らかである」（14）と述べている。さらにウィルソンは、「『ピクウィック・クラブ』*The Pickwick Papers,* 1836-7 は、物語が軌道に乗り始めると、本能的に、いわば無意識のうちにまっすぐにフリート

監獄に向けて突き進むのに対して、『バーナビー・ラッジ』*Barnaby Rudge,* 1841 は、意識的にニューゲイト監獄を目指す」（17-8）と続ける。オーウェル（George Orwell, 1903-50）は、彼の『評論集』*Critical Essays* の「チャールズ・ディケンズ」'Charles Dickens'のなかで、「『デヴィッド・コパフィールド』*David Copperfield,* 1849-50 の大詰めの一章に、デヴィッドがユライア・ヒープとリティマーが服役している監獄を訪ねるところがある。ディケンズは恐ろしい「模範」監獄（"model" prisons）というものを本気で考えているらしい（中略）」（27）と書いている。

ディケンズは作家として成長する過程で、ヴィクトリア時代の価値観（男性的、率直、熱意）の体現を目指す男として夫となり、子供思いの親となっていった。読者を意識する人気作家になっていくなかで、彼は、観念、想像の世界において監獄、犯罪、刑罰への関心をかきたて、犯罪者、反抗者の役割を果たしていく。しかし、現実の世界での社会悪に対する彼の態度は厳しいものであった。犯罪等の悪に対する嫌悪、不快感は、作品のなかで悪人に対する最終的扱いに表現されるだけでなく、作品以外（ディケンズ自身が主宰する週刊誌や他のジャーナリズム等）でも、刑罰改革、監獄改革を含む一つの社会改革への主張にもなっていった。

犯罪産業（犯罪が仕事である）が繁栄し、多数の死刑相当犯罪、祭事や娯楽としての公開処刑、扇情的な読み物や演劇等が、増大してきた低賃金労働者を含む大衆のみならず、中産階級までも楽しませていたディケンズの初期の時代から、「彼の生涯はまさにこの偉大な法及び刑罰改革の時期と一致して」（Collins, 2）いくのである。フーコー（Michel Foucault, 1926-84）が、『監獄の誕生』*Discipline and Punish, The Birth of Prison* で言う、抑止を目的とする祭式的で華々しい身体刑から、矯正を目指す規律＝訓練を中心とする刑罰へ変っていくこの時代、監獄改革が国際的に大いに議論されていた。英国においても、刑罰のあり方、囚人の扱い方をめぐる監獄方式の論争、つまり無言方式対分離方式の論争が多くの人々を巻き込んだ大きなものとなった。ディケンズは分離方式に強く反対し、相対的に無言方式を支持した。その理由を、彼の作品及び作品以外のものから検証し、この論争と彼の考えとの関連を考察したい。

Ⅱ　時代背景

ジョン・ハワードの『十八世紀ヨーロッパ監獄事情』が示すように、十九世紀初期までの監獄は、ヨーロッパ大陸は無論であるが、特に英国においては、不潔で、悲惨な環境にあり、看守等関係者により恣意的に運用される腐敗の温床であった。一八二〇、三〇年代、このような状態に対する監獄や刑罰に関する改革論争は国際的に行なわれていた。英国では、一八二〇年代半ばの監獄規律論は、相互に混ざり合っているが、およそ三つの流れ、すなわち、一・勤勉と勤労による矯正（ベンサム主義）、二・宗教による矯正（フライ夫人派）、三・刑罰による抑止（シドニー・スミス）（Collins, 56-7）があった。そのような

状況のなかで、一八二三年と一八三五年の監獄法の成立等で、監獄監察官の誕生その他が決められ、規律の緩んだ、悲惨で、恣意的な監獄から、規律の厳しいそして目的（抑止か、矯正か、等）を明確にした監獄への改革が進んでいった。監獄の規律、規則及びその運用が放任的なものから強制的なものへと変っていくなかで監獄方式が論争の一つとなった（Collins, 7）。

「（中略）法と監獄がその悪の道において彼ら（全く価値のない、堕落した悪人たち）をさらに筋金入りにした（中略）」(61)と『アメリカ紀行』*American Note,*1842 が述べているように、当時の監獄における最大の問題点の一つは、緩んだ規律のなかでの交流（犯罪歴の異なる囚人同士の交流により、例えば初犯の囚人が常習的な犯罪者となっていくようなこと）による弊害であった。その撲滅を意図した二つの主要な監獄方式が、当時、監獄理論が最も進んでいたアメリカから既に入ってきていた。外国からの新しい考えが、この種の議論の経験が乏しい英国に入ってきたので、論争は白熱した。

二つの方式の一方はフィラデルフィア方式 Philadelphia System であり、分離方式や独房監禁とも呼ばれる。囚人は一日中独房で過さなければならない。独房では、道具と聖書が与えられ、手工芸品等を作る労働や悔悟の瞑想をして一日を過す。フィラデルフィアの東部重罪監獄が最も進んだ事例として有名であった。アメリカでは、この方式が厳格に運用されていたので、囚人の精神への悪影響を始めとする諸問題が発生していたが、英国では、運用を緩和、修正した分離方式が導入された。道徳、宗教（聖書）教育が大きな役割を果たすので、教誨師たちの多くがこの方式を支持した。他方は、オーバーン方式 Auburn System であり、無言方式と呼ばれる。囚人たちは共同で作業をすることができるが、会話、身振り等によるコミュニケーションは厳重に禁じられ、規則を破ると厳罰に処される。独房で寝るのが理想的だが、多くの無言方式の監獄では、費用面から囚人は共同監房に収容されていた。看守他関係者は、この方式の実施を監視するために二十四時間囚人と共にいなければならない。ニューヨークのオーバーン監獄やシンシン監獄が有名である。

一般に分離方式は心の変化に効果があり、深い悔悟から正直な人間を作るのに有効と考えられ、より矯正的であると言われていた。多くの独房を必要とするので、監獄の建設に多大な費用を要するが、少ない運営要員で対応できる。一方監視の厳しい無言方式は再犯を抑制できる従順な人間を作るのに有効と考えられ、より抑止的であると言われていた。既存の監獄で実施可能であるが、実効を上げるためには、多くの運営要員を必要とする。その時代、英国の監獄は警備と衛生環境の面から建替えや新築が必要となっていたので、そこでの監獄方式の採用を巡って論争は激化していった。英国では、このような論争が方式自体の有効性の議論よりも、付随する事柄の相対的重要性に関する意見の相違を中心に行われていた。すなわち、囚人の心身の健康維持、公的資金（税金）である予算の使用法、監獄労働や監獄自立の是非等に関する議論であった。

監獄改革の気運のなかで、難題であった監獄規律の緩み、恣意性等の問題を解決するために、一八二九年、コールドバス・フィールズ監獄所長にチェスタートン（George Laval Chesterton,? -1868）が就任し、無言方式の導入を含む急激な監獄の改革を実施していった。彼が改革を推進する一八三〇年代の後半には、ディケンズが頻繁に監獄を訪問し、チェスタートンから監獄についての教授を受けたり、情報を入手したりしていた。

一八五〇年、ディケンズは、無言方式について彼の主宰する週刊誌『ハウスホールド・ワーズ』[1]*Household Words* に「模範監獄」であるペントンヴィル監獄の分離方式に異議を唱え、次のように書いている。

> 結局、我々の結論は、無言方式の方がより異論が少ないということであるとしても、それは、我々がこの方式を、理論的に良き二次的な懲罰とみなしているからではなく、この方が厳格な方式であり、賢明な運営管理が可能であり、はるかに費用も少なくてすみ、反対が出そうなほど著しい相違を呈してはおらず、囚人の気持ちを甘やかしたり、自惚れを増大させたりすることがないと思われるからである。（「甘やかされる囚人たち」'Pet Prisoners'　1850 年 4 月 27 日号）

ディケンズは、無言方式を積極的に支持したというより、方式に付随していた厳しい懲罰やその経済性等の見地から賛成した。それに加えて、後述する様々な理由から彼は、分離方式に反対だったのである。

「一八七〇年、ディケンズが亡くなったとき、犯罪者に対処する制度は、今日私たちが受け継いでいるものと認められるが、彼の少年時代の制度は別の世界のものである。前者は二十世紀の制度と同種のものであるが、後者は十六世紀と同種のものであった」（Collins, 3）ように、二つの方式論争は、時代が大きく変る節目に生じ、改革の大きなうねりの時代であったからこそ白熱したのである。そのような時代背景ゆえに、監獄、犯罪、刑罰に強い関心を持つディケンズは、この論争に大いに関与したのである。

Ⅲ　ディケンズの分離方式反対の理由

先ず、コールドバス・フィールズ監獄所長チェスタートンへの敬意および彼と対立する者への反感が挙げられる。一八三五年、ディケンズは『ボズのスケッチ』に収録する素描の取材のため、コールドバス・フィールズ監獄を初めて訪問した。そこで所長であるチェスタートンの厳格さ、特に踏み車の使用法に感銘を受け、その後しばしば訪問し、友人関係を育み、生涯にわたり彼との協調関係を保っていった。チェスタートンは腐敗した監獄の立直しに送り込まれた退役軍人で、多くの悪習的既得権益を持つ側からの抵抗、摩擦を排除し、一八三四年、すべてのコミュニケーションを禁止する無言方式を導入した。その後二十年にわたる彼の在任期間中、コールドバス・フィールズ監獄はこの方式を実施し続

けた苛酷な監獄（例えばここには、囚人をだめにするという理由で暖房設備がなかったこと等）であった。またチェスタートンの在任二十五年間で自殺者が一人しかいなかったという記録も残っている（Collins, 61）。

チェスタートンは、アメリカの分離方式が冷酷で、自殺、発狂、精神異常、心身の衰弱等をもたらす精妙な拷問であり、それを緩和、修正したものとはいえ、英国の分離方式は非現実的であると主張し、方式論に固執する理論家（分離方式論者の教誨師等）たちを侮蔑していた。また、ディケンズが、チェスタートンと同様に、無言方式を採用しているトットヒル・フィールズ監獄所長のトレーシー（Augustus Frederick Tracy, 1798-1878）と家族ぐるみの友人であったことや、同監獄で副所長であったオースティン（William Austin）がバーミンガム監獄へ移り、囚人を虐待し、敬意を抱くマコノシー[2]（Captain Alexander Machonochie）所長を追放したことも、ディケンズが分離方式に反対した要因の一つであろうと考えられる。

ディケンズは、チェスタートンとトレーシーを高く評価し、称賛している。一八四二年のアメリカ訪問時に、ニューヨークの監獄（矯正院）を見学した後、フォースター[3]（John Forster, 1812-76）への手紙で次のように書いている。

> わが国でもアメリカ方式を採用して監獄の規律を改善していることは、もちろんおわかりと思います。しかし、アメリカの監獄を褒めちぎっている本の著者たちは、チェスタートンやトレーシーが管理する監獄を見たことがないのだ、と私は自信をもって言えるのです。(Forster, Ⅰ, 210)

さらに、ディケンズが実際の運営に深く関与した売春婦や浮浪者の女子更正施設ウラニアの家[4] Urania Cottage は、その運営面でチェスタートンの意見も聞いており、コールドバス・フィールズ監獄を参考にした部分があると言われている。一八五〇年には、同監獄がロンドンの売春婦の専用収容施設となったこともあり、ウラニアの家への収容者の派遣源でもあった（Collins,67-8）。

また、この監獄へ巡回治安判事として派遣されたベンジャミン・ロッチ（Benjamin Rotch）との確執も、ディケンズに大きな影響を与えた。ロッチは、敬服する分離主義者の理論家アズヘッド（Joseph Adshead, 1800-61）の無言方式への非難に賛同し、チェスタートンやディケンズと対立した。彼は、ウラニアの家への収容者の提供やディケンズの監獄訪問を禁止し、『アメリカ紀行』は無論であるが、ディケンズの他の著作をも批判した。ロッチは誰とでも対立するエキセントリックで、依怙贔屓の著しい性格であった。彼の極端な施策（例えば、オーストラリアへの流刑者に羊毛を刈る技術を教えるのに本物の羊を監獄に持ち込んだ）は、『パンチ』*Punch* 等で揶揄の対象となったが、彼の矯正に関する意見（例えば、女囚への料理教育等）には傾聴に値するものがあったことも事実であ

る（Collins,69）。この個人的な部分を含めた対立の余波は、『デヴィッド・コパフィールド』*David Copperfield,* 1849-50 の第六一章「悔い改めた二人」 'I am shown two interesting Penitents'で、分離方式への皮肉となって表れる。

デヴィッドが通ったセイラム・ハウス校の校長であったクリークルが、突然ミドルセックス州の治安判事として再登場し、デヴィッドとトラドルズを自らの監獄に招待する。彼は、どんなに金をかけても、囚人の最高の快適さを図ってやるだけで、監獄以外のこの広い世界においてなすべきことは何もないという口ぶりであった。デヴィッドは、分離方式の監獄の食事が一般の兵隊、水兵や労働者等、正直に働いている大多数の民衆の食事と比較すると質量ともに異常に良いことを指摘した後に、次のように述べる。

> だが、わかったことは、「方式」そのものが高い生活水準を要求していることである。つまり、この方式を断固採用しさえすれば、この方式が、その点（食事）のみならず他のあらゆる点においても、一切の疑問を取り除き、一切の変則を解決してくれるのである。「この方式」以外に、考慮に値する方式があるとは誰一人思ってもいないようであった。(780)

クリークルは、そこに収監されているユライア・ヒープとリティマーを、監獄見学者たちに紹介する良き悔悟の事例として、デヴィッドたちに会わせる。これは、ディケンズが批判し続けた分離方式を推進する教誨師たちがもたらした形式的（見せかけの）悔悟（後述）の典型として描かれている。小説では、最初の部分（五~七章）で登場するだけのクリークルを唐突に、必然性もなくミドルセックスの治安判事として登場させ、更にユライア・ヒープとリティマーに偽善的な悔悟の言葉を口にさせた。それはベンジャミン・ロッチへのディケンズの個人的な揶揄と見られている（Collins, 162-3）。ディケンズのロッチに対する感情、そしてチェスタートンやトレーシーへの敬意から考えても、ディケンズが分離方式に反対したのは当然のことであろう。

次に、独房監禁が囚人の精神に及ぼす悪影響である。ディケンズは『アメリカ紀行』で、フィラデルフィアの東部重罪監獄の分離方式に対する疑念を表明した。この本はアメリカ、ヨーロッパ各国で反響を呼び、監獄改革の議論に対して長期間にわたり大きな影響を与えた。この作品における囚人や監獄の描写は、『ボズのスケッチ』の「ニューゲイト訪問」での処刑前夜の死刑囚、『オリヴァー・トゥィスト』*Oliver Twist,* 1837-9 の「ユダヤ人、この世の最後の一夜」'The Jew's last Night alive'のフェイギンや『バーナビー・ラッジ』*Barnaby Rudge,* 1841 のニューゲイト監獄の描写に続く想像的な表現である。そこで彼は、独房監禁がもたらす精神への弊害について書いている。

> ここの方式は厳格きわまりなく、そして絶望的な独房監禁である。その効果において、

それは残酷でかつ誤っていると私は信じている。

その目的においては、その方式は、優しく人間的であり、そして矯正を意図したものであることは十分納得がいく。しかし監獄の規律としてこの方式を考えだした人たちや、それを実行する慈悲ぶかい人たちは、自分たちが行っていることを分かっていないと私は確信する。数年に及ぶこの恐ろしい懲罰が受刑者に与える、途方もない責め苦と苦痛を推し量ることのできる人はまずほとんどいないのである。（中略）このように毎日じわじわと頭脳の神秘的な働きに干渉することは、身体に加えるいかなる拷問よりも計り知れない悪い結果を生むものであると思う。(111)

そして心の不安定をもたらす要因である、独房に閉じ込められる受刑者が感じる独房（＝墓）のなかへ「生きたまま埋められる（buried alive）」という主題が描かれる。

この陰鬱な館に入ってくるすべての囚人の頭と顔全体に、黒い頭巾がかぶせられる。そしてこの闇に覆われたままで、（中略）収監期間が終わるまで決して二度と出ることのない独房へと連れて行かれる。彼は妻や子どもの消息を聞くことは決してない。（中略）彼は生きながらにして葬られた人間となる。そしてゆっくりとした月日が何年も経った後に掘り出される。その間、責め苛む不安と恐ろしい絶望以外にはすべてのものに対して死んだ人間となるのである。(112-3)

この独房=墓（監獄＝墓）という主題は、『ピクウィック・クラブ』の第四三章で、ピクウィック氏に部屋を貸した大法院の囚人が死に際に語った言葉、「二十年間、この忌まわしい墓（フリート監獄）に二十年もいたんだ」（594）からの流れであろう。これは、『二都物語』*A Tale of Two Cities,* 1859 のマネット医師（バスティーユ監獄の独房に生きたまま埋められた）に繋がり、独房監禁と精神異常の関係を示すものとして描かれる。そして『リトル・ドリット』*Little Dorrit,* 1855-7 のドリット氏も、実際の独房ではないが、「生者の墓」（the living grave）（249）であるマーシャルシー監獄に二十三年間の「生きたまま、監獄（＝墓）に埋められて」監獄腐朽（長期間の監獄生活で、心身共に衰弱し、朽ちた状態になること）により精神に異常をきたし、この世を去るのである。

一八四六年、ディケンズはスイスのローザンヌに滞在中、そこの監獄医であるヴェルデイル氏（M. Verdeil）との交流のなかで、ローザンヌの監獄が改革の際に、「共和国精神が相通じる」と考え、アメリカのフィラデルフィア方式を採用した結果についてフォースターに報告している。この分離方式の実施が多くの囚人の精神障害や錯乱を招く結果となり、ヴェルデイル氏は自ら動いて分離方式を撤廃させたこと、『アメリカ紀行』の内容についてもディケンズと医師の二人の考えが一致したこと、長い刑期は無言方式でも、囚人に悪影響を与えることを書き送っている（Forster, Ⅰ, 390）。

しかし『アメリカ紀行』における東部重罪監獄の描写は誇張であり、実際には、公式に認められた面会は許されていたし、水道のパイプ等を利用して他の囚人と連絡することも可能であった。囚人の増加も、厳密な分離方式の実施を不可能にし、中庭では男女の囚人が一緒にいたこと等が記録に残っている。また、この方式では、個人としての囚人の存在は消失し、所長と教誨師だけが名前と犯罪歴を把握する状況で、長期間の独房監禁となるが、囚人の友人等が早期釈放を求め政治的圧力をかけるのが、当時の通常のやりかたであった（Collins, 123-4）とは言え、独房監禁の精神への悪影響は、『アメリカ紀行』に登場する囚人たちを見れば明らかである。

『アメリカ紀行』は、多くの分離方式論者たちから反論、非難を浴びた。その筆頭であるアズヘッドは、僅かな滞在で何がわかるのか、またディケンズは滞在中には、一言も批判めいたことや不明の点について何も言っていないのに、後で批判するのはおかしい、と非難した。また、レディングの州立監獄の教誨師であったジョン・フィールド（Rev. John Field）は、ディケンズの作品を、情報不足で書いた単なる娯楽に過ぎず、真摯に議論するのはおこがましいと反駁した（Collins,118-9）。しかし『アメリカ紀行』は、アメリカでも、発刊後すぐに三千部売れた事実からしても、ディケンズの想像力豊かな作品として、監獄のあり方についての提案として読者に訴えたことは事実である。

そして一八六一年、『ハウスホールド・ワーズ』廃刊後、ディケンズが主宰した週刊誌『オール・ザ・イアー・ラウンド』[5] *All the Year Round* は、短期間の独房監禁（分離方式）の妥当性を認めているが、医師たちの見解として次のように述べている。

> 短い刑期にとって、その（独房監禁による懲罰）妥当性は問題にならないはずだ。しかし長期間、最近までよく行われていたように十八ヶ月にもわたって適用されるならば、囚人の態度に、有害な作用を及ぼすことがわかっている。医師たちは次のように述べている。（中略）その懲罰が何ヶ月も続くと収監者のあらゆる神経系統を衰弱させる影響を及ぼし、肉体的活力の喪失や外部からの喜怒哀楽への抵抗力の損傷をもたらす（中略）。（「囚人たちに関する対話」'A Dialogue Concerning Convicts' 1861 年 5 月 11 日号）

分離方式が精神に及ぼす悪影響に関するディケンズの考えは長く変わらなかったのである。

三つ目は教誨師への疑念である。一般に英国の監獄における教誨師たちは宗教者でない所長や他の役人に比べ、弁も、筆も立ち、予算獲得等政治的な場で力を発揮したので、その地位は高いものであった。特に分離方式を採用する監獄では、彼らは大きな権力を持っていた。分離方式は宗教に重点を置き過ぎたために、その方式が及ぼす心身への影響を深く考慮せずに進められたとの主張もあるほどである（Collins, 63）。コールドバス・フィー

ルズ監獄やトットヒル・フィールズ監獄が採用した無言方式は、非宗教関係者や出費を抑えたがる役人等に支持されたが、教誨師を含む監獄関係者の多くからは強く批判された。多数の監獄関係者の分離方式を支持する流れが、政府に分離方式の模範監獄としてペントンヴィル監獄[6]の建設を決定させた。

また、ディケンズは、教誨師たちが推進する分離方式の欠陥の一つとして、囚人の「形式的な悔悟」を指摘し、批判する。それは、彼らが聖書と共に過ごす独房監禁の利点を強調し過ぎる結果生じるものであった。厳格な分離方式論者のジョン・フィールド教誨師は、収監者たちに良き囚人になるための問答集を提示したくらいなので（Collins, 153）、彼の極端な意見は、他の分離方式の支持者たちからさえ共感を得られなかった。ディケンズは、教誨師たちの中にも優れた人物がいることを認めているが、囚人への甘い対応（踏み車等の厳しい扱いを望むディケンズの考えからすれば）が方式運用の根本にあったために、分離方式を是認することはなかった。

『ハウスホールド・ワーズ』の「甘やかされる囚人たち」で、ジョン・フィールド教誨師が述べる分離方式が効果的に機能した囚人の悔悟事例をいくつか取り上げ、それらを何の証明もされていない、信頼できない「形式的悔悟」としてディケンズは批判する。処刑されたマニング[7]（George Manning, 1821-49）が、自分の犯罪の犠牲者には何の関心もないと述べたことと同様の思考が、囚人の悔悟に関する問題として存在すると主張する。

> 現在の問題は、（我々が観察するように）これに類似し、より偽善的な傾向の強い精神状態に関するものである。もはや死の恐怖はなく、悔い改めたふりをすることや表面だけのまやかしの悔恨を生み出させるあらゆる誘因が存在するのである。（「甘やかされる囚人たち」1850 年 4 月 27 日号）

そして、フィールド教誨師は、重罪で服役中の二十歳の囚人、ジョン・スタイルズ（John Styles）が、入獄後五ヶ月の時点で、妹に宛てた手紙を、悔悟の事例として示している。

> 「親愛なる妹よ、私がここにいることを思い悩まないでくれ。父母にしたことを考えると、私は思い悩まざるを得ない。私がそのことを考えると、気分が悪くなる。私は、神が許してくれることを望む。私は日夜心からお祈りをする。監獄に入れられたことを思い悩むかわりに、私はそれを神に感謝すべきである。なぜなら、ここに来る前、私はほんとうに無分別な生活をしていたからだ。私の頭のなかに、神はどこにもいなかった。私が考えていたことは、破滅への道であった。かわいそうな昔の仲間たちによろしく伝えてくれ、そして私は、彼らが悪の道を変えることを望む。（中略）私は自分の愚かさに気づいた。私は、彼らが自分の愚かさに気づくことを望む。しかし、

警察の世話にならなかったならば、私は気づかなかったであろう。警察に捕まったことは私にとって望ましいことである。親愛なる妹よ、日曜には、教会へ行きなさい。遊技場や劇場に行くことを考えてはいけない。そこはおまえにとって良くないところだからだ。悪の誘惑がいっぱいあるからだ」（同上）

これに対してディケンズは、次のように反論し、悔悟が見せかけであることを主張する。

よく観てください。重罪を犯したジョン・スタイルズは、「ほんとうに無分別な生活をしていた」のです。それに関する彼の意見は最悪である。一方重罪を犯さなかった彼の仲間たちは、「惨めな仲間たち」である。ジョンは*自分の*「愚かさ」をわかっていたし、彼らの「悪の道」をわかっている。多くの法を犯していない連中が、行くところが遊技場や劇場である。ジョンの心を苦しめるのは、遊技場や劇場であって、重罪ではないのである。ジョンは、重罪を犯していない人たちの世界の悪について、彼の仲間と妹に説教するために説教壇のなかに入り込んでいる。ジョンが、いつも本心を語っているとすれば、そこに誇張はないのであろうか？自分が行くことのできる教会には行きなさい、そして行くことのできない劇場には行ってはいけない。それは、寓話「狐とぶどう」と同じ意味合いではないのか？（中略）それはいいことであろうか？　それは確固たる真実であろうか？（同上）

このような意見は、「ディケンズだけではない」と分離方式を支持するプレストン監獄の教誨師のウォルター・クレイ（Rev. Walter Clay）も述べているほどである。「口がうまく、ふざけた、極悪な偽善者がお上品な教誨師をだましてきたことは、監獄における宗教の象徴的なものとして、英国の大衆にはわかっていること」として、「威厳ある判事、有能な編集者、人気作家、そして我らが哲学者『パンチ』もこの見解を認めている」とクレイの息子も書いている（Collins, 151）。それは、囚人の矯正を示す道具に信仰告白が利用されたからであり、監獄方式の持つ目的よりも宗教的な要請が優先された結果であろう。ディケンズは、宗教を過剰に押し付ける狂信的な宗教関係者を作品のなかで揶揄している。『ピクウィック・クラブ』のスティギンズや『荒涼館』*Bleak House,* 1852-3 のチャドバンド等が、宗教を利用する偽善者として侮蔑的に描かれている。

四つ目に監獄労働と市場、監獄と救貧院の関係、囚人の豊かな生活等から、監獄が大衆を圧迫することが挙げられる。無言方式に比べると、分離方式は囚人の矯正のために、労働がより有効であると考える。踏み車、踏み臼、槙肌紡ぎ、回旋盤、ショット・ドリルのような無益な苦役を黙々とやらせる英国の監獄のほうが望ましいと考えるディケンズは、一般の労働と競合する位置づけの監獄労働及び監獄が監獄らしくないアメリカの状況について『アメリカ紀行』で述べている。

人口が過剰になっていない新しい国として、どこの監獄でも収監者たちに役立つ有益な仕事を見出し得る一つの大きな利点をアメリカは持っている。（中略）合衆国においてさえも、囚人労働と自由市民たちの労働を、明らかに後者が不利になるようなやりかたで競合させる原則に対してはすでに多くの反対する人々がいて、その数は数年後も減りそうもない。(59-60)

アメリカの州監獄や矯正院において、当初私は実際に監獄―不名誉な罰と忍耐の場所―にいることを確信し難かった。それ（監獄）がそれ（監獄）らしくないという人間的な誇りは、その事柄についての真の英知あるいは哲学に根ざしているか、今もなお大いに疑問に思っている。(60)

一八五〇年、『ハウスホールド・ワーズ』では、英国の模範監獄における囚人の優遇と囚人労働の一般市場への影響について次のように書いている。

まず、模範監獄であるペントンヴィルとその最寄りの聖パンクラス救貧院との食事を比較対照してみよう。監獄では、一人、週に二八オンスの肉が供されるが、救貧院では一八オンスである。監獄では、一人、週に一四〇オンスのパンが与えられるが、救貧院では、立派な体の大人一人につき九六オンスである。（以下ジャガイモ、ココア、おかゆ、糖液、軽いビールと比較が続く）（救貧院の）設備は、監獄よりも劣っている。この囚人たちの設備に費用がかかる本質については後述する。（「甘やかされる囚人たち」1850 年 4 月 27 日号）

そして我々は次のように明言しなければならない。英国のような事情の国では、労働と労働者に関して、監獄労働で作り出されたものを、既に過剰供給されている市場に持ち込む妥当性に関して強い疑念を抱くのである。この件に関して、最近、商人たちからいくつかの抗議がなされているが、我々はそれらに根拠が十分あるという事実に目をつむることはできない。（同上）

さらに一八五三年、ディケンズは『ハウスホールド・ワーズ』に、イングランドとスコットランドで監獄監視官を勤めた分離方式論者のフレデリック・ヒル（Frederic Hill, 1803-96）の著作の書評掲載を巡って、編集スタッフのヘンリー・モーリー（Henry Morley, 1822-94）と対立した。ヒルは、無益な重労働（踏み車、回旋盤等）による再犯の抑止性を否定し、監獄を監獄労働や仕事教育を通じての社会復帰への矯正の場と位置付けていたからである。その本は、また監獄自立論を支持していたので、結果的にその書評

は掲載を拒否された。同年ディケンズは同誌にヒルへの反論の記事を掲載し、何もしなくても食べることができる怠惰な囚人たちと彼らの態度について次のように述べている。

> だから、多くの人々が思っていたように、正直な人たちの利益を考慮することが、この単純な疑問に対して我々のはっきりした答えを出させるのである。正直に働く人々の税金が、ただぶらぶらしている犯罪者たちを養うのに使われるのはより望ましいことなのか？それとも、囚人たちはできる限り、監獄における食事代と宿泊代を稼がされるべきではないのか？ヒル氏の意見では、監獄はほとんど自立できるということであろう。（「監獄の内外で」'In and Out of Jail' 1853 年 5 月 14 日号）

> ヒル氏の言う労働が始まると、監獄の外にいたと言うよりもむしろ監獄のなかにいたと断言する連中がしょっちゅう見受けられるようになった。なぜなら彼らは十分な食事が与えられ、何もしなくてもよかったからである。一例を挙げると、ある囚人は自分が収監されている建物の様々な欠陥について治安判事たちに繰り返し苦情を言っていたが、無視されていた。最後に彼は、もしこの場所をもっと快適にしないのならば、出て行くぞ、と治安判事の閣下たちを脅したのである。もう一つの出来事では、ヒル氏が査察を受け持つ昔ながらの監獄に収監されている囚人が刑期を満了し、自由の身になったことを告げられるが、彼はこれまで一年間他の人々の楽しみのために監獄にいたが、今度は自分の楽しみのために留まる、とごねたのである。（同上）

一八四〇年代後半から、治安判事の間では、囚人の増加が問題となっていた。『パンチ』で、コールドバス・フィールズ監獄を「チェスタートン亭」、トットヒル・フィールズ監獄を「トレーシー・ホテル」と呼んでいる揶揄が示すように、囚人が監獄から出たがらない風潮が存在していた。その原因の一つが、囚人を増長させる分離方式における矯正の考えであったとディケンズのみならず多くの人が批判した。フィラデルフィア方式を修正した分離方式を導入した模範監獄として建設されたペントンヴィル監獄は特にこのような状況であった。ペントンヴィル監獄は比較的小規模で、独房の数は約五百（コールドバス・フィールズ監獄は約三倍の囚人がいた）であった。当初、十五年以下の刑期で、十八歳から三十五歳までの、最高十八ヶ月の厳しい独房監禁に耐えることができ、矯正の実効を期待できる肉体的に強い受刑者たちを収容した。苛酷で無益な労働を課する懲罰より教育と保護観察的指導に主眼が置かれたので、収監者はほとんど初犯者であった。主に、オーストラリアへの流刑囚を現地での社会生活に適応できるようにする目的で運営され、当初、一定の成果をあげた。しかしペントンヴィル方式（分離方式）が囚人の精神に悪影響を与えることが明確になってくるにつれて、刑期の短縮がなされ、独房監禁の厳格さは薄れていった。その質量共に十分な食事（普通の貧しい人々と比較して）や偽善的な囚人に

よる「形式的悔悟」は批判、揶揄の対象でもあった。さらにディケンズは監獄に対する公共の金（税金）の使い方にも厳しい意見を表明している。彼は一八四〇年代の監獄の新設や改築ブームを批判し、宮廷や城のような監獄建設に予算を使うよりも、一般の人々にとって重要である教育を始め、時代が必要とするものへの使い道があると主張した（Collins, 75）。

最後に、矯正に関する考えが挙げられる。ディケンズは、少年の犯罪者に対して比較的温かい眼で見る一方、成人の犯罪者（常習者が多い）には矯正の見込みがほとんどないと見ている。それゆえ、道徳や宗教教育に重きをおき、彼らを厳しく扱わない分離方式のやり方には賛同できなかった。前述の『ハウスホールド・ワーズ』の「監獄の内外で」でも取り上げられているような監獄の居心地の良さを示す囚人の態度は、矯正の対象にならない監獄ずれした彼らの狡猾さを表すものと指摘する。彼は、監獄が矯正の場所でもあるが、懲罰の場所でもあると述べ、常習の泥棒、詐欺師、浮浪者である囚人には、彼らが最も嫌がる踏み車や回旋盤のような無益な苦役が必要であると主張する。監獄と囚人を病院と病人に例え、ヒルの考えを批判する。

> 監獄を治療のための病院と考えるとき、ヒル氏は、監獄が通常、不治の病人のための病院であることを忘れているらしい。すでに彼が正しく指摘しているように、監獄は泥棒を商売とする連中でいっぱいである。娑婆にいるとき、彼らにとって「盗むこと」が仕事なのである。（「監獄の内外で」'In and Out of Jail' 1853 年 5 月 14 日号）

ディケンズは、罪を犯していない人々（特に貧しい人々）を苦しめる犯罪者たちを許すことができないのである。彼は、成人の犯罪者、特に矯正が望めない常習者には、犯罪予防のためなら厳しい苦役を課し、終身禁固でもいいと考える。『ハウスホールド・ワーズ』の後に、ディケンズが主宰した『オール・ザ・イアー・ラウンド』の記事、「悪漢」[8] 'The Ruffian'では次のように書き始めている。

> 私は、悪漢を乱暴者（Rough）と耳触りのよい言葉に言い換える最近の風潮に強く反対する。だからこの正確な言葉をこの評論の表題に戻すことにする。私の目的は、それどころか、悪漢が我々の間で、悪漢でないすべての人たちが我慢できないところまで大目に見られている事実にこだわることである。（1868 年 10 月 10 日号）

ディケンズは彼らを玄人の悪漢と呼び、監獄で刑期を終えた後も犯罪稼業に確実に戻っていく状況に対し、強い取締りと懲罰を要求する。

> いったいなぜ、名うての盗賊や悪漢が野放しにされているのだろうか？その男が自

分の自由を暴力と略奪以外のために役立てることは決してないし、出所しても、一日も働くことはないであろう。（中略）私は、悪漢が私の邪魔をしないように、すべての普通の人たちの邪魔をしないように締め出すことを要求する。私は、悪漢が女王陛下の臣民たちに切りかかり、彼らのポケットから時計を引っ手繰る代わりに、当然のこととして、公共の利益のためにどこかで木を切り、水を汲むような仕事をさせることを要求する。（同上）

そして『エドウィン・ドルードの謎』*The Mystery of Edwin Drood,* 1870 では、若いローザ・バッドが社会的地位があり、知的な成人犯罪者であるジョン・ジャスパーに対して戸惑っていることへの説明が挿入されている。

（どうして彼女は犯罪者の知能を知ることができようか。専門の学者ですら、犯罪者の知能を別種の恐るべき奇跡と考えずに、普通の人間の普通の知能と関連づけようとするために、常に見当違いを犯しているのだから）(220)

同書の注釈に、「ディケンズは、『犯罪者の知能』に関する彼の知識が、弁護士、看守他監獄の役人、警官のそれよりもはるかに優れていることをたびたび強調した」、そして「彼の作品及びジャーナリズムのなかで、彼は『人間的な心』を持たないある種の犯罪者に関する信念を繰り返し主張していた」と記されている（368）。彼は、犯罪者が普通の人とは異なる知能や心理の持ち主であると考えている。彼の最後の作品でも、このように書いていることは、特に成人の犯罪者の更正が根本的に難しいとする彼の見解がずっと続いていたことを示すものであろう。

一方、若い犯罪者や犯罪予備軍に対しては、彼は、矯正の可能性を見ている。『アメリカ紀行』では、同じ屋根の下にある少年たちのための二つの施設について述べている。一つはボイルストン校という、世間から見捨てられたが、まだ非行に走る前に引き取られた少年たちのための施設で、ディケンズはそこの生徒たちの元気ではつらつとした姿を賞賛している。もう一つは少年非行者の感化院である。少年たちは、矯正の度合いに応じて四つのクラスに分けられている。よい行いをすればクラスが上がることを教えられる。ディケンズは次のように述べ、彼らの社会復帰への大きな可能性を示している。

この施設の意図と目的は、厳しいが、親切で思慮深い扱いを通して少年犯罪者を更正させることであり、また監獄を罪を清めることや向上の場にすることであって、堕落と腐敗の場にすることではない。（中略）一言で言えば、彼を破滅から救い出し、悔い改めた、役に立つ人間として社会に復帰させることである。すべての点からみて、人間性と社会政策ということをあらゆる面から考えても、このような施設の重要性に

ついてはコメントの必要もないだろう。(59)

『オリヴァー・トゥイスト』において、ローズ・メイリーは、強盗を手伝わされたオリヴァーがピストルで撃たれた後に運び込まれた時、傷ついた少年への寛容な心情を吐露する。

「でも、たとえあの子（オリヴァー）が悪かったとしても」ローズが続けて言った。「あの子がどれだけ小さな子供かを、考えてあげてくださいな。母親の愛情とか家庭の安らぎを一度も知らなかったかもしれませんわ。酷いめにあったり、ぶたれたり、食物もろくになかったでしょう、だからあの子を悪いことに引っ張り込むような男たちの仲間に入ってしまったのかもしれませんわ。(231)

『ボズのスケッチ』の「刑事裁判所」では、放蕩仲間に加わり、ちょっとした盗みで捕まり、長期間の拘留後、軽い懲罰を与えられた少年が釈放されることになった。彼は、迎えに来た母親に対して反抗的な態度をとるが、最後に、わっと泣き出し、母に手をとられて帰っていく（231）。このように、更正の可能性を予測させる少年の他に、同書の「ニューゲイト訪問」では、すりの罪状で収監されている十四才以下の少年たちが、監獄の「学校」で過ごす様子が描かれている。彼らは、「そして、十四人もそろったあんなに恐ろしい子供の顔を、我々は見たことがない。―（中略）―正直な眼差し一つなく―すべての少年のまばたき一つ一つに、絞首台と監獄船の末路が示されていた」と表現され、彼らを「救いようがない矯正不能の悪党たち」[9]（241）と呼び厳しい視線を注いでいる。しかし一八五〇年及び以降の版では、その表現を「放任が生んだ救いようのない連中」と書き改めている。そして『ハウスホールド・ワーズ』一八五一年一月四日号の「去る年の最後の言葉」'The Last Words of the Old Year'は、空腹のためにパン屋でパンを盗んだ二人の子供（彼らの頭は被告席の上に届かないくらい小さい）が捕まり、鞭打ちの刑に処されたことと英国の王子が祝福されて誕生したことを述べている。この王子も哀れな子供たちと同じ環境に放り投げられたら、この両者に何の違いがあるのか？と述べ、偉大な女王に、この状況を考えることとあらゆる子供たちの国家の母になることを願っている。

このようにディケンズは、矯正に関して成人の常習的犯罪者と少年犯罪者、少年非行者に対する対応の違いがあっても、矯正に望めない者たちには厳しい対処を望むのである。

Ⅳ　終わりに

監獄方式の論争は、分離方式の模範監獄であるペントンヴィル監獄の建設により、政府及び監獄関係者の間で、分離方式が優勢な時期もあったが、どちらの方式も決定的な優勢を得ることはなかった。一八五〇年、『ハウスホールド・ワーズ』の「甘やかされる囚人

たち」で、ディケンズは、マコノシーの提唱する評点方式 Marks System を、「矯正的と考える二次的な懲罰方式のなかではいちばん」と述べ、相対的に支持していた無言方式のより改善した方式として評価した。一八六〇年代、英国の監獄では、この方式がより取り入れられるようになり、囚人の服役態度による分類も進んでいった。『オール・ザ・イアー・ラウンド』は、一八六二年九月二〇日号の「進歩的なアイルランドの囚人」'The Irish Convict's Progress'において、英国の監獄は改善され、かつての悲惨な状態ではないと認めたうえで、評点方式が発展したアイルランド方式 Irish System の優れた点について述べている。それは犯罪其々を評価し、刑罰を決定する考えである。そして監獄における刑の執行は刑期によって異なるが、まず数ヵ月の厳格な分離監禁及び粗末な食事に始まり、その後粗末な食事を含む厳しい監獄生活を送る、次に監獄と一般社会の中間段階への移行、最後に、監視のない労働と普通家屋での居住というおよそ三段階の方式で実施される。十五年の刑で服役したマーフィー氏が、八ケ月の独房監禁、七年余のスパイク島での厳しい獄中生活、二年の中間段階と五年のいわゆる自由な生活で刑期を終えていることや囚人たちが一般の人たちのなかで識別されることなく仕事をする状況等が「アイルランド方式」の成果として記されている。前述のような分離方式の欠陥が明らかになってきたこともあって、無言方式対分離方式の論争は、評点方式を利用した英国方式とアイルランド方式をめぐる議論へと変わっていった（Collins, 169）。

オーウェルは、評論「チャールズ・ディケンズ」において次のように書いている。

> 彼のほとんどどの本においても、誰もが十九世紀の初頭四分の一にいるような奇妙な気持ちになる。事実、彼はその時代に戻りたがるのである。一八五〇年代半ばに書いた『リトル・ドリット』は二十年代の終わりを扱っているし、『大いなる遺産』*Great Expectation*, 1860-61 は、年代をはっきりさせていないが、明らかに二十年代と三十年代を扱っている。彼の生きた時代には、現代の世界を実現させることになった幾多の発明や発見（電信、元込め銃、生ゴム、石炭ガス、木材パルプから作る紙）がはじめて登場したのに、彼はこういうものを作品のなかにほとんど書き留めていないのである。(40)

オーウェルが指摘するように、ディケンズは無秩序ではあるが、活気溢れるリージェンシー時代やヴィクトリア時代初期が好きなのである。様々な社会改革に向かって激動する喧騒の時代は、彼が活躍するには最もふさわしい時期であり、作品を通して、自らの存在を大きくしていった時期であった。そのような状況下では、彼がこの方式論争へ関与していったのは当然のことであろう。ディケンズの監獄論は、専門家が主張するような方式論と呼べるものはなく、方式を取り巻く環境や問題に対する作家としての想像力を駆使した判断であり、主張であった。

一八六〇年代に債務者監獄が廃止され、ほぼ同時期に、監獄船、囚人船も廃止され、一八六八年に公開処刑及びオーストラリアへの流刑が廃止された。監獄運営の中央政府への移管（一八七七年に完了、それまで監獄は様々な組織により運営されていて、私営の監獄も存在していた）や各種監獄の整理統合も進行していた。ディケンズの後年（一八六〇年代)、監獄を取り巻く様々な体制が現代のものに近づいていったのである。さらに家庭内の問題（別居から離婚)、エレン・ターナン（Ellen Ternan）との関係、そして経済的理由及び自己満足のための公開朗読への没頭等、ディケンズを取り巻く環境も変ってきた。そのような状況下でディケンズは、監獄方式についても、監獄の状況、監獄で起こった出来事等についてあまり語らなくなった。この方式論争の推移、時代の流れ、個人的状況からディケンズは監獄や監獄方式に関して意見を表明する必要を感じなくなったのであろう。

ディケンズは矯正不能の犯罪者たちの存在を認識し、彼らを厳しく扱うべきであると強硬に主張する一方で、救いようのない悪人であっても、彼らの精神を狂わせることを認めないのである。ディケンズは、彼らを人間として扱っているのである。不快な懲罰は当然としても、不必要に発狂、錯乱や自殺等に追い込むことは、どんな人間にもしてはならないと確信しているのであろう。ディケンズの作品に登場する「悪漢」たちは、むごい死に方でこの世を去ることはあるが、独房監禁状況で自殺することや狂い死にすることはほとんどない。『二都物語』のマネット医師は、長期間の独房監禁の悪影響により、精神異常を起こすが死には至らず、周囲の愛情で全面的ではないが回復する。（一般的な独房監禁ではないが、『リトル・ドリット』で、長期間債務者監獄に閉じ込められていたドリット氏の死は、長期間にわたる心の独房監禁がもたらしたものと言えるかもしれないが）ディケンズは、分離方式の最大の特徴である独房監禁、つまり人間が長期間「生きたまま埋められる」ことを容認できなかったのであろう。

コリンズのように、監獄に関するディケンズの考えが、世論に影響されたとか、彼の初期と後期の時代では、急進的から、保守的に、反動的に変わっていったという主張もあるが、(Collins, 21, 171-2)、フォースターは、ディケンズの伝記、『チャールズ･ディケンズの生涯』*The Life of Charles Dickens* の第十一章、Ⅲ「人間的特質」'Personal Characteristic'のなかで、「最も親しい友人に対しても、自分が自分自身に対して示す以上にも、以下にも示さないことは、ほんのわずかな人物たちが持つ特徴であるが、ディケンズはまさにそのような人物であった」（Ⅱ, 377）と述べ、三十三年間にわたる交流のなかでのディケンズの変ることのなかった特質を語っている。同書ではディケンズが、彼の芝居上演を巡っての女王とのやりとりで、自分の主張を貫き、「今朝、眼が覚めたとき、私は自分の主張を通したことを思うととてもうれしかった」（Ⅱ, 391)と述べていること等、彼の一貫した（頑固な）個人的な特質を物語る事例が記述されている。そしてオーウェルが「ディケンズの物語の中心になっている動きは、ほとんど変わりなく中産階級の世界のなかにある」(3)と述べ、ギッシング（George Gissing, 1857-1903）は『チャール

ズ・ディケンズ論』*Charles Dickens, A Critical Study* で、「我々から見ればディケンズは、ほとんどの事柄において保守主義者なのであり、その意図において民主的であることは ── この言葉の意味を本来の意味で使うならば ── ないのである」（188）と述べているようにディケンズは、まさに英国の保守的な中産階級の人であり、さらに「（中略）彼はラディカルだったのである。もちろんこれは、礼儀正しく『前例から前例へと』動く、のろのろとした法制度、英国生活の根底に流れる貴族的な考え方に不満を抱く人物のこと意味している」（Gissing, 187-8）、そのような人物なのである。さらにギッシングは『荒涼館』のラウンスウェル氏をラディカルな人物として評価している。成功した北部の鉄工業者であるラウンスウェル氏は、「まっとうな能力と働きによりのし上がってきた」、「かなりの資本家」であり、明確に「偉大な中産階級に属している」のである。彼はチェズニー・ウォルド（リンカンシャーのデッドロック卿の邸宅）で小間使いとして奉公している若い娘を、息子の嫁にするために、そのふさわしくない場所（上流階級の婦人に仕えていること）から退かせるという目的を持って、娘の主人であるデッドロック卿を訪ねる。彼はかつて対等な話し合い等、及びもつかなかった上流階級の大立者に対して堂々と自らの意見を主張し、時代の流れに対応できず困惑するデッドロック卿を尻目に目的を果たす。ラウンスウェル氏はラディカルに行動したのである（194）。そのような意味で、頑固で、保守的なディケンズもまた偉大なる中産階級に軸足を置き、ラディカルに行動し続けたのである。それはウィルソンが指摘するディケンズの「想像力のなかで演じる〈犯罪者〉の態度か、〈反抗者〉の態度」（時代により強さに違いはあるが）と絡み合って、それぞれの特徴のバランスをうまく変えながら彼の行動を生涯支え続けたのであろう。監獄、犯罪、刑罰への関心はそのような状況のなかで生涯持ち続けたのは確かである。特に犯罪者は、初期のサイクス、フェイギン、クウィルプ、ジョナス・チャズルウィット等、下層階級出身で、犯罪者になるべくして生まれてきたような典型的な人物から、社会的体面や外見を意識する中産階級の人物たち、『我らが共通の友』*Our Mutual Friend,* 1864-65 における学校の教師であるブラッドリー・ヘッドストーン、『エドウィン・ドルードの謎』での教会のオルガン奏者であるジョン･ジャスパーへと進化している。犯罪者の態度がよりディケンズに近づいていったのである。

この方式論争は、分離方式のもたらす弊害への反対がその時代の要求及び風潮、論敵の存在、監獄、犯罪、刑罰に対する幼時からの強迫観念、作家としての想像力等と強く混じりあって、一つの主張するディケンズを作ったのである。方式論争の推移、監獄を含めた刑罰改革の流れとともに、主張を支える理由が弱くなれば、論争の場から離れるのは当然である。それでも、ディケンズの監獄、刑罰、犯罪への考えは、多少の差異こそあれ、この論争を経ても一貫していたと考える。

Primary works:

Sketches by Boz. 1833-36; Ed. Dennis Walder. London: Penguin Classics, 1995.

『ボズの素描集』　藤本隆康介訳、近代文藝社、1993 年
The Pickwick Papers. 1836-37; London: Penguin Classics, 1999.
『ピクウィック・クラブ』　北川悌二訳、三笠書房、1974 年
Oliver Twist. 1837-39Ed. Katheleen Tillotson. Oxford and New York: Oxford UP, 1966.
『オリヴァー・トゥィスト』　小池滋訳、全２冊、ちくま文庫、1990 年
Barnaby Rudge. 1841Ed. Clive Hurst. Oxford: Oxford UP, 2003
『バーナビー・ラッジ』　小池滋訳、集英社、1975 年
American Note. 1842; Oxford: Oxford UP, 1978.
『アメリカ紀行』　伊藤弘之、下笠徳次、隈元貞弘訳、岩波文庫、2005 年
David Copperfield. 1849-50; Oxford: Oxford UP, 1978.
『デイヴィッド・コパフィールド』　中野好夫訳、新潮文庫、2001 年
Bleak House. 1852-53; London : Penguin Books, 2003.
『荒涼館』世界文学大系　青木雄造、小池滋訳、筑摩書房、1969 年
Little Dorrit. 1855-57Ed. Stephen Wall, Helen Small. London : Penguin Books, 2003.
『リトル・ドリット』　小池滋訳、筑摩文庫、2002 年
A Tale of Two Cities. 1859Ed. Simon Schama. London : Everyman's Library, 1993.
『二都物語』　中野好夫訳、新潮文庫、2001 年
The Uncommercial Traveller. 1860-69; Oxford: Oxford UP, 1978.
『無商旅人』　広島大学英国小説研究会訳、全２冊、篠崎書林、1982 年

Reference:

Bentley, Nicolas. Slater, Michael. Burgis, Nicolas. *The Dickens Index*. Oxford: Oxford UP, 1988.
Collins, Phillip. *Dickens and Crime, 2nd ed*. London: Macmillan, 1964.
Forster, John. *The Life of Charles Dickens*. 2 vols. London: J.M.Dent and Sons, 1969.
ジョン・フォースター　『チャールズ・ディケンズの生涯』　間二郎、中西敏一訳、研友社、1987 年
Foucault, Michel. *Discipline and Punish, The Birth of the Prison*, 1975;
ミシェル・フーコー　『監獄の誕生－監視と処罰－』　新潮社、1997 年
Gissing, George. *Charles Dickens*. 1898; London: Blackie and Son, 1926.
ジョージ・ギッシング『チャールズ・ディケンズ論』　小池滋、金山亮太訳、秀文インターナショナル、1988 年
Hayward, A.L. *The Dickens Encyclopaedia*.1924 London: Routeledge & Kegan Paul, 1969.
House, Humphry. *The Dickens World*. London: Oxford U.P. 1979.
Orwell, George. *Critical Essays*. London: Secker & Warburg, 1970.
ジョージ・オーウェル『オーウェル評論集』　小野寺健訳、岩波文庫、1982 年
Schlicke, Paul. ed. *Oxford Reader's Companion to Dickens*. Oxford and New York: Oxford UP, 1999.

Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. London: Martin Secker & Warburg, 1970.

アンガス・ウィルソン　『ディケンズの世界』　松村昌家訳、英宝社、1979 年

Wilson, Edmund. *The Wound and the Bow*. Athens: Ohio U.P. 1997.

エドマンド・ウィルソン　『エドマンド・ウィルソン批評集』　中村紘一他訳、みすず書房、2005 年

西條隆雄編　『ヴィクトリア朝小説と犯罪』　音羽書房鶴見書店、2002 年

中西敏一他編　『Sketches by Boz. ロンドンの情景』　開文堂、1989 年

中西敏一他編　『ピクウィック読本』　東京図書、1987 年

中西敏一　『イギリス文学と監獄 ——18，19 世紀イギリス文学の一断面 ——』　開文堂、1991 年

ジョン・ハワード　『十八世紀ヨーロッパ監獄事情』　川北稔、森本真美訳　岩波文庫、1994 年

北条文緒　『ニューゲイト・ノヴェル―ある犯罪小説群』　研究社、1981 年

註

1 ディケンズが創刊し、経営・編集などワンマン的に腕を振るった家庭向き週刊誌。寄稿者の有名無名を問わず、原稿にはディケンズが遠慮なく手を加えた。一八五〇年三月三〇日号～一八五九年五月二八日号まで続く。

2 評点方式 Marks System の発案者。無言方式対分離方式論争の後、より有効な方式としてクローズアップされる。ディケンズはマコノシーの考えに敬意を抱き、この方式を支持した。売春婦や浮浪者などの女性犯罪者の更正施設ウラニアの家 Urania Cottage でこの方式を参考にした。

3 『チャールズ･ディケンズの生涯』*The Life of Charles Dickens,* 1927 の著者、ディケンズの親友であり、彼の伝記作家。

4 一八四七年一一月開所、ディケンズは一八五八年夫人との別居の件で、主唱者のクーツ（A. B. Coutts, 1814-1906）女史との確執が生じ、この施設の運営から退く。

5 『ハウスホールド・ワーズ』廃刊後のディケンズが主宰する週刊誌、 一八五九年四月三〇日～一八七〇年（ディケンズの存命中）及び彼の死後、この週刊誌は一八九五年まで続いた。

6 一八三九年建設決定。一八四二年十二月開所。

7 一八四九年十一月十三日、ホースマンガー・レイン監獄で、一七〇〇年以来、初めて夫婦で公開処刑されたマニング夫妻（George and Maria Manning）の夫。この処刑をディケンズは見ていて、その不快感を『ハウスホールド・ワーズ』一八五二年十月三十日号の「ベッドの上で、寝つかれずに」'Lying Awake'で述べている。彼らは下宿人を残忍な方法で殺し、生石灰をかぶせて台所の下に埋める。夫人のエキセントリックな性格、行動は、この処刑を有名なものにした。彼女は、『荒涼館』のホーテンス（またはオルタンス）のモデルと言われている。

8 『無商旅人』*The Uncommercial Traveller*, 1860-9 に収録されている。

9 「どうにも救いようがない悪党たち」'hopeless and irreclaimable wretches'は『ボズのスケッチ』の 1850 年及び以降の版では、「放任が生んだ救いようのない連中」'hopeless creatures of neglect'に変えられている。